

# 大学生の英和辞典利用

## ——初級レベルの英語学習者について——

安井 健一郎

### A Report on Japanese College Students' Use of English-Japanese Dictionaries: A Focus on Learners of Basic English

YASUI, Kenishirou

#### Abstract

It is often noted that one aspect of declining English-language ability among Japanese college students is that they can't use English-Japanese dictionaries well. One of the main reasons for this is that students have seldom needed to use dictionaries since they started learning English. Moreover, according to a sample of students who need to learn basic English, they had hardly ever experienced lessons on English-Japanese dictionaries at junior or senior high schools. However, in a college where students should learn more independently, it is essential that they can use dictionaries efficiently. Not being able to effectively use a dictionary may severely hinder any progress in English-language ability.

This paper discusses the necessity of English-Japanese dictionaries, even in learning basic English, and considers how well the students use those dictionaries and how high school teachers instruct the use of them. Finally, the paper introduces an approach to have the students make better use of English-Japanese dictionaries.

#### 要 約

大学生の英語力低下の1つの側面として、英和辞典をうまく利用できないことがある。これは、英語を学習し始めて以来あまり英和辞典を利用する必要がなかったという環境が影響しているようである。また、基礎的な事項を学習する必要がある学生に話を聞くと、中学校や高校での辞書指導もほとんど受けていない。しかし、より自立した学習が求められる大学においては辞書の効率的な利用は重要であり、それが出来ない学生は、大学においても英語力をあまり高めることのないまま卒業を迎えることになってしまう。

本報告では、英語の学習において英和辞典を利用する必要性を確認し、学生の辞書利用の実態と高校でのその利用指導について検討する。さらに、英和辞典の利用に慣れさせる取り組みについて報告する。

キーワード

英和辞典 (English-Japanese dictionary) / 英語力低下 (declining English-language ability)  
辞書指導 (instruction of dictionary use) / 英語教育 (English education)

学生に焦点を当てたものであり、以後、その前提で報告を進める。

## はじめに

外国語学習において語彙力の強化は重要なことであり、辞書はそのために大いに役立つものであり、活用すべきものである。多くの学生が中学校で正式に英語を学習し始めることから考えると、大学入学時には6年以上は英和辞典を利用してきたと思われるのだが、授業で辞書を引かせてみると、とても長い間利用してきたものを扱っているとは思えない様子がとても多く見られる。また語彙力とともに文法力の強化も外国語学習においては重要である。そして多くの学習用英和辞典においてさまざまな文法や語法に関する情報も与えてくれており、うまく利用すればとても便利なはずだ。しかし、このような情報は特に初級・中級の学習者には見向きもされないことが多く、とても役立てられているとは言えない状況である。

辞書の利用というものは語学の学習時に限ったものではなく、将来にわたって日常的にその必要性が生じ得るものである。そのようなときにうまく対処できるようにするためにも辞書を引けるようになるということは大切なことだ。しかし実際は辞書がうまく引けないままの学生が多い。学習を進めるにつれ辞書に慣れ、自然と利用法が身についていくことの多い上級者と異なり、初級者・中級者には適切な指導が必要であると考えますが実態はどうなっているのか検討する。

本稿は主に初級英語を学習する必要がある

## 1. 学生の辞書利用の実態

### 1.1 学生の利用している英和辞典とその利用

授業時に学生たちに英和辞典を持参するように指示すると、それまでいかに辞書を利用してこなかったか、またその指導を受けてこなかったかを表す言葉や行動が多く見られる。まず、「辞書を持っていない」という言葉が聞かれることがある。そして持って来ている、初級英和辞典やポケット英和辞典であることが少なくない。また、自分の辞書がないためか親などから譲り受けた変色しかけた古いものを持参する学生もいる。さらに、電卓が発展したようなタイプの1~2行のディスプレイに基本的な語義のみが表示されるものを「電子辞書」として利用しようとするケースも見られる。これはかなり初級の学生の場合であるが、中学校や高校でよほど辞書が必要とされていなかったのだろう。当然、授業時に持参した辞書を利用させようとしてもスムーズに行くことはない。

そうした学生たちよりもやや習熟度が高い学生のクラスになると、学習英和辞典の入った電子辞書<sup>1</sup>が圧倒的となる。大辞典が入ったものを利用する者も見かけられる。紙の辞書はもう少数派だ。多くの場合、それらの電子辞書は高校生のときに購入しており、それなりに利用してきたはずなのだが、やはりう

まく使えているようには見えない。例えば、見出し語からではなく、複数のキーワードを入力することで例文を検索する機能ばかりを使って与えられた英文の意味を調べようとする。これはある意味では効率的で、速やかに目的の語の例文にたどり着けることが多いが、その場しのぎであり、見出し語から調べていないので、なぜそのような意味になるのかを語と語のつながりから考えることが難しく、定着しない。従ってそのような利用の仕方が中心であるということは、英語の学習をしている場面では不適切である。また、見出し語から調べている場合でも例文や成句にたどり着けない学生が多い。これは電子辞書の階層性を理解していないことにも原因がある。電子辞書で例文を見るには、まず見出し語を表示させ、そこにある訳語の中から求める語義を表しているものを選んだ上で「例文ボタン」を押して画面表示を換えなければならない。成句の場合は訳語の絞り込みは不要だが、見出し語を表示させた上で画面を切り換える必要がある。こうしたしくみが理解されていない。横から学生の電子辞書のボタンを押して例文や成句を表示させると、「どうやったんですか？」と驚かれることもしばしばである。このようなことになってしまうのは、それまでに例文や成句を辞書で調べる必要性があまりなかったからである。言い換えると、辞書の初めのほうに書かれている（表示される）語義さえ調べられれば用が足りていたということで、そもそも辞書の指導などは必要がなかったのかもしれない。

ある高校が生徒たちに行ったアンケート調査では、中学時代に辞書を引かなかった生徒は26%、辞書を持っていなかった生徒は13%だった。さらに、教科書の新出単語の意味をどのように調べたのかという質問には「教科書の後ろで調べた」と答えた生徒が

29%だった。<sup>2</sup>また別の学校のアンケートでは、「教科書の後ろ」でなく市販の「教科書ガイド」という学校の教科書の解説書に単語の意味が出ているのを丸暗記したり、授業中に先生が意味を確認するまで待ってそれから教科書に書き込む生徒が多かったりすることが明らかになったという。<sup>3</sup>これらは英語を学習し始めの段階から英和辞典を利用していない者が少なからずいるということのみならず、その必要性が感じられない、さらにはそれで間に合ってしまうような授業が行われているということである。

学生たちの実態を見る限り、高校での辞書利用および辞書指導の実態も中学校とあまり変わらないようである。日本と韓国の高校生約8千人のアンケート<sup>4</sup>を分析した森下氏は次のように指摘している。「日本の高校生は、生活の中で自分の言葉として実際に英語を使う経験が乏しく、英語は役に立つとは思っていても使ってみようという行動にまで至っていない。」(森下2008) 図表1はそのアンケートで明らかになった日常での英語使用経験の差である。

図表1 日韓高校生の国内（日常）での英語使用経験

(日本n=3,700人 韓国n=4,019人)

	日本 (A)	韓国 (B)	差(A - B)
英語で書かれた説明書を読む	32.0%	77.6%	-45.6%
教科書以外の英語の本を、自分から進んで読む	27.4%	76.1%	-48.7%
テレビ・ラジオでの英語音声ニュースを聞く	27.3%	60.6%	-33.3%
英語で道を尋ねられたるに答える	24.5%	76.7%	-52.2%
英語で日記を書く	22.5%	73.8%	-51.3%
英語で書かれたインターネットなどのホームページやブログなどを読む	20.9%	79.4%	-58.5%
英語でハガキやカードを書く	18.7%	58.5%	-39.8%
英語での電子メールやハガキ、手紙を受け取って読む	17.9%	58.2%	-40.3%
英字新聞を読む	14.1%	60.8%	-46.7%
英語の天気予報を聞く	8.6%	54.1%	-45.5%

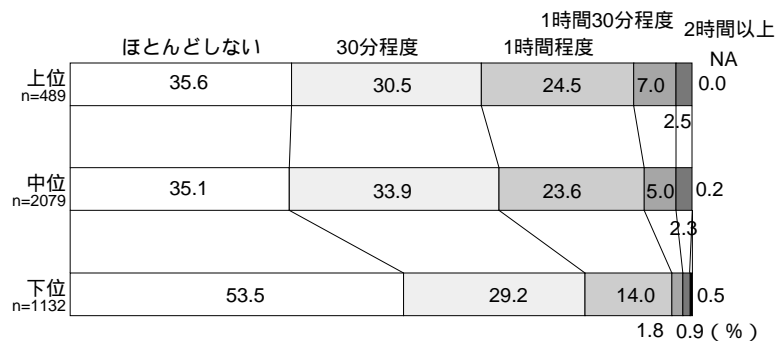
ベネッセコーポレーション『東アジア高校英語教育GTEC調査2006』より作成  
 日本では2006年7月～2007年1月に、韓国では2006年9月に実施。  
 URL [http://www.benesse.jp/berd/center/open/report/eastasia\\_gtec/soku/index.html](http://www.benesse.jp/berd/center/open/report/eastasia_gtec/soku/index.html)

自己申告ではあるものの驚くほどの差がある。国家戦略として英語教育を推進しており、社会全体の英語に対する意識も高い韓国と日本を単純に比較はできないが、日本の高校生の消極性が感じられる。英語学習の必然性を感じていないものが多いといっているのではないだろうか。また、同じアンケートで日本の高校生の1日の英語の平均学習時間（宿題・予習・復習として）を調査している。こちらの結果にも驚いてしまう。平日については「30分程度」が32.0%、「ほとんどしない」が

40.8%という結果が出た。休日については「30分程度」が21.4%、「ほとんどしない」が30.2%だった。この調査はGTEC for STUDENTSを受験させた上で行っており、そのトータル・グレードから英語力を上位、中位、下位の3段階<sup>3</sup>に分けた比較も行っている。（図表2）

本稿で対象としているのは、主に下位の生徒ということになるが、その5割以上が日常的に宿題・予習・復習をほとんどしていな

図表2 能力別平日の英語の平均学習時間（宿題・予習・復習として）



ベネッセコーポレーション『東アジア高校英語教育GTEC調査2006』より作成

い。「30分程度」を含めると8割を超えてしまう。これは、それで間に合ってしまう授業が高校で行われているということでもある。

英語教育全体の問題であるが、日常、英語を使用する必然性を感じなければ学習に対するモチベーションは低くなる。自分から英語を使おうという積極性も見られない。英語に触れるのが学校の授業時だけの生徒が多いと思われるが、それも宿題・予習・復習をしなくても済んでしまうような内容であれば、英語力が伸び悩むのも当然であろう。辞書に関して言うと、学校外では使わないであろうし、授業時も積極的な利用の必要性も生徒たちには感じられないだろう。

## 1.2. 英和辞典をうまく利用するという こと

このような貧弱な経験しかしていない学生たちは、単語の意味を英和辞典を利用して調べるように指示されても、たくさんの訳語からどれを選んだらよいのかその選択に困ってしまう。少しずつ慣れていってもらえないのだが、そのような場合、文脈から考えたり、前後の語句とのつながりや文法的な事項などを考慮するなどして適切な訳語にたどり着くことが求められる。従ってポケットタイプのものや初級英和では用が足りなくなる。やはり学習においては訳語以外の語法などの情報や例文も豊富な学習英和辞典を利用することが望ましい。学習英和辞典とは一般に「1500～2000ページ程度で、収録語数が4万～10万の辞書を指しており、基本語を中心に丁寧な解説をつけたもので、とりわけ日本人が誤りやすい内容に対する解説や英語圏の国々の社会的・文化的な背景をも併せて解説してくれる辞書」(鷹家1999)と考えられている。

英和辞典を引く際に意識すべきことの1つは、辞書に出ているのは「訳語の例」ということである。完全に意味が一致する日本語が書かれているのではないからこそ、いくつかの「訳語の例」が書かれているわけで、場合によっては利用者の側で文意や文脈に合わせたさらなるアレンジが必要になってくる。しかし、訳語の選択を間違ってしまったら、「訳語の例」として並んでいる以外の表現を用いることに不安を感じてアレンジなしでそのまま用いたりしてしまうと、奇妙な日本語の文が生まれてしまう。これでは英和辞典をうまく利用できていないとは言えないだろう。適切な訳語の選択や必要に応じたアレンジ、そしてそれらをまとめて自然な日本語で表現できるようになることが必要だ。また英文をつくるときにも同じことが言える。ある日本語に対する英単語がいくつかある場合、どれが文意を表すためにより適切であるのか、その語をどう用いるのがよいのかなどといった情報をうまく見出せるようになることが必要だ。

## 1.3. 英和辞典の利用指導

学習英和辞典には訳語や発音、語法、例文の他にも、動詞の自/他や文型、名詞のC/U、形容詞の限定・叙述といった情報がある。さらに《米》、《正式》、《古》などのスピーチレベルの表示や「人が物を〔材料で〕作る」(makeについて)などの多種の括弧で表される情報もある。しかしこれらについて、投野氏は「英和辞典の編纂者たちが苦心してきたさまざまな工夫が一体どれだけ実際に活用されているのかに関して、あまり楽観視は出来ない」(投野2000)と指摘し、自身の大学生に対する調査の結果を示している。それによると、[C/U]について「知っ

ている」と56%が答えたのに対し、実際にそれを使ったのは45%、[自]については「知っている」が85%だったが、実際には使えたのは53%だったという。

このような基礎的な記号ですら半数程度の学生にしか理解されていないということは、他のさまざまな情報を含めて放っておいて理解されるようになるとは考えにくい。辞書をうまく利用するためにはこうした情報、特に基礎的な記号の理解が不可欠であるので、ここに辞書指導の必要性が生じる。ふつう、見出し語の後には発音記号が続き、さらに品詞が続く。4月の授業開始時の学生の様子を見ると、まずこの品詞についての理解ができていない。名詞、動詞、形容詞などというのは漠然とわかっているようだが、動詞の自/他になるとかなり怪しい。可算名詞・不可算名詞についても知識はあるものの、それがC/Uで表記されるとほとんどわからなくなる。形容詞は副詞との違いに混乱し、限定・叙述ということばはほとんど理解できていない。また一語一品詞との思い込みから誤った品詞からの訳語の選択を行ってしまうことも多く見られる。そこで品詞区分と基礎的な記号から理解を促す必要がある。そしてやはりあまり自発的に行われていない例文利用の指導も必要だ。英和辞典のこうした情報は、利用者が意識して利用することを前提に書かれているので、自ら利用しようとする態度の醸成もその効果的な利用のためには必要である。

## 2. 辞書指導の実態

### 2.1. 学習指導要領での位置づけ

現行の学習指導要領（1998年度改定、2002年4月1日施行）で外国語の目標は、中学校、高校とも「外国語を通じて、言語や文化に対

する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、聞くことや話すことなどの実践的コミュニケーション能力の基礎を養う」とされている。旧学習指導要領に比べ、外国語を通じての会話によるコミュニケーション能力の養成をより強く打ち出したものであり、その手段として「楽しい授業」への転換が図られてきたのだが、その中で辞書の指導はどのように盛り込まれているのだろうか。

中学校については、「辞書の初歩的な使い方に慣れ、必要に応じて活用できるようにすること」との記述がある。これは、旧学習指導要領の「辞書の初歩的な使い方に親しませるように留意するものとする」とあまり変化はなく、集中して指導する時期を設けるのではなく、適宜指導していくというものである。継続的に辞書を使わせることによって「初歩的な使い方に慣れ」させていくことは確かに望ましく思われる。しかし、授業時間が削減された中、指導事項も削減されてるとは言え、授業時に辞書に慣れさせるまでの使用を生徒たちに促し、指導する時間をどの程度設けることができるかは、技術とバランスが必要とされる難しい問題である。タイミングを逸して、ほとんど指導できないことも考えられる。また、教科書に新出語句の一覧が日本語訳とともにまとめられていては、教えられる中学生にとって辞書を用いてそれらの意味を調べる必要性を見出すことは難しいだろう。もちろん教科書の巻末にある語句一覧表と辞書が同じものであるなどという認識は教師の側はないであろうし、生徒の側にも少ないであろう。そこで、単に語義を探すだけに留まらない辞書の使い方の指導が必要になるはずなのだが、それがあまり生徒に定着していない状況を考えると現場における一層の工夫が必要である。

高校については「辞書などの使い方を指導し、効果的に利用しながら、自ら外国語を理解し、外国語を使おうとする積極的な態度を育てるようにすること」と記されている。こちらは旧学習指導要領の「辞書の使い方を指導し、効果的に利用させるよう配慮するものとする」から発展し、自立的な学習に際しても辞書を使えるようにさせることが盛り込まれた。高校あるいは大学から社会に出た後に外国語を使う場面に出くわした際に、辞書をうまく用いながら対処できるという能力を養うためにも、これは重要な視点である。しかし高校の場合も中学校と同様に、どのようなタイミングでどの程度の時間をかけて指導していくかという問題がある。そして初級および中級の生徒において「自ら外国語を理解」するために自ら辞書を利用するという点についてかなり困難な実態があり、学習指導要領に則した辞書指導がうまくできていない状況を表している。

文部科学省は中学校について2012年度から実施される新しい学習指導要領を2008年3月に公示した。この中で外国語の目標を「外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、聞くこと、話すこと、読むこと、書くことなどのコミュニケーション能力の基礎を養う」としている。「聞く」、「話す」に「読む」、「書く」を加え、総合的な英語力を養うことを目指している。そのためにより充実した語彙力が必要となり、指導語彙数も現行より300語増えて1,200語となっている。授業時数も各学年とも年間105から140と大きく増やされた。では辞書指導についてはどう変わったか見てみると、「辞書の使い方に慣れ、活用できるようにすること」とされ、「初歩的な」、「必要に応じて」という修飾語句が取り除かれている。これは

小学校において英語教育が始まること、指導語彙数が増えることなどに関連して、より充実した辞書指導を目指していると言ってよいだろう。

高校の新しい学習指導要領は2013年度から実施する予定で、2008年12月にその案が発表された。外国語の目標を「外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、情報や考えなどを的確に理解したり適切に伝えたりするコミュニケーション能力を養う」とした上で、英語科目の改編をおこなうとともに、「英語の授業は英語で行うのが基本」<sup>6</sup>と明記している。この大幅な改定の中で、高校で教える英単語数は1,800語程度と4割増えている。<sup>7</sup>現状の1,300語程度でも消化不良を起こしている中、この指導語彙数の増加に対応するには、英和辞典を生徒自ら積極的に利用させるようにすることが必要である。この案の辞書指導に関する項目は「辞書の活用の指導などを通じ、生涯にわたって、自ら外国語を学び、使おうとする積極的な態度を育てるようにすること」とほとんど現行のものと変わりはないが、先のような状況を考えると、やはり辞書指導の充実が必要となるだろう。また目標にある「情報や考えを的確に理解したり」という部分はインターネットなどの利用を考慮したものと思われる。インターネット利用時に外国語の情報を理解するには、まさに自発的、自立的な辞書利用が必要である。

## 2.2. 高校での指導

学習指導要領に辞書の指導が盛り込まれているものの、学生の実態は先に見たようにその指導をほとんど受けていないようである。そこで、初級から中級の生徒が多く在籍する

東京都内の2つの高校の英語科主任クラスの先生、E氏とK氏に意見を伺った。\*近年、多くの高校では通常のコースの他に特別進学コースなどの習熟度の高い生徒を集めたコースがあり、同じ学校でも生徒の学力は幅広くなっている。従ってコースによって状況が異なると思われるため、今回は「一般的な生徒」の場合を中心に話を伺った。

高校での辞書の指導があまり行われていないと思われる中、まず英語学習における英和辞典の必要性についての認識を尋ねると、両氏ともその必要性は強く認めており、予習時のみならず授業時にも持参して利用する必要があるという意見だった。では実際に生徒が学校に辞書を持参しているか伺うと、E氏の回答は「コースによって状況は異なるが(自ら持参する生徒は)1割未満」とのことだった。以前は学校指定の辞書を購入させていたものの、電子辞書への要望が多くなり指定辞書の購入をやめたところ、このような状況になったようだ。ただE氏独自の対応策として、教室に20冊以上の辞書を用意して、持参しない生徒に活用させるという工夫をされている。K氏もコースによる違いを前提にしたうえで「持参率は高い」と言う。ただやはり習熟度が低いクラスになると持参率はかなり低くなるとのことだった。また、電子辞書が多いという状況も共通しているようだ。

では実際に授業ではどのように英和辞典を活用しているのだろうか。E氏の場合は、中心的な使い方として「予習してくる生徒が少ないので、授業中に単語を調べさせている」とのことだった。またそれだけでなく、基本的な単語には生徒たちが覚えている以外にもいろいろな意味があることをわからせるため、少しくつろいだ雰囲気のもとで毎回数語を指摘し辞書で調べさせている。例えば、bookは「本」、runは「走る」という意味しか

知らないであろう生徒たちに、「予約する」や「経営する」といった意味を調べさせていることである。これは単語についての理解を促すだけでなく、辞書に慣れさせるためにも良い取り組みだと思われる。しかし、生徒の自発的な利用としては意味の確認以上の活用はなかなか出来ていないようだ。K氏は、授業中での活用について、「補足的な利用にとどまっている」と言い、具体的には品詞や動詞の自/他の区別の確認などを行っているとのことである。ただ習熟度の低いクラスを除いては生徒たちは自らよく利用している様子が見られるようだ。

さらなる活用のために、英和辞典の使い方を生徒に指導する必要性を感じるか尋ねてみると、両氏ともその必要性を感じているとのことだが、実際には指導できていないようだ。このことについてK氏は「シラバスに遊びがないので時間が割けない」という現状を説明してくれた。学生たちが辞書指導を受けたことがない様子を裏付ける指摘である。またE氏は電子辞書の利用指導の難しさを指摘した。こちらも学生たちが自分の電子辞書をうまく利用できていない実態につながる指摘である。

とかく悪者にされながらも多数派となっている電子辞書について、お二人にそれぞれの学校の英語教員の認識を伺うと、E氏の学校では「電子辞書派と紙の辞書派にわかれていて統一見解がない」、K氏の学校では「紙の辞書を支持する方がほとんどで、電子辞書を支持する方はほとんどいない」とのことだった。では自分の考えはどうかというと、両氏とも完全に否定するような立場ではなく、電子辞書が発展してきていることは評価されているようだ。ただそれぞれ、紙の辞書の良さも強調されている。E氏は書き込みや線を引いて単語の記憶に役立てられることを、K氏



は辞書を引く作業そのものが単語の記憶に役立つということをおっしゃった。これらは電子辞書ではクリアされないであろう紙の辞書ならではのメリットといえるだろう。

最後に担当している生徒たちの英和辞典を活用するための基本的な知識について印象を伺った。名詞、動詞、形容詞といった主要な品詞は相対的によく理解されているものの、形容詞の限定・叙述用法についてはかなり理解度が低いと両氏とも感じているようだ。E氏は名詞のC/Uの表記もほとんど理解されていないと指摘した。また、動詞の活用は概ね利用できているが、発音記号や例文、成句などはあまり、あるいはほとんど利用できていないという共通した意見も頂いた。

英和辞典の利用は、していても限定的である場合が多く、生徒たちがそこにある情報を生かしきれていない様子は、学生たちの辞書利用の実態につながっている。授業中に他律的に使ってもなかなか定着しないということもあるだろう。カリキュラムに追われて、辞書指導の時間が持てないというのも悩ましい。また、いつまでも自己流の利用であっては情報を生かしきれない。困難を伴うだろうが、授業中に継続的に辞書を引かせながら、少しずつでも指導していくという工夫が必要だ。

E氏やK氏のようにまだまだ不十分と感じながらも英和辞典を利用させるように努力する教員がいる一方で、生徒たちが英和辞典を利用することにあまり関心がない教員も多く存在する。辞書の利用など自然に出来るようになるものという考えなのか、授業中に生徒たちに辞書をつかうことを促すようなことはほとんどしないし、生徒たちがどう辞書を利用しているかも気にかけることはない。以前、ある高校生に英文中にある *expect* の意味を尋ねたところ、彼は辞書を引いた上で「外を見

る」と答えた。しかし彼の辞書にはそのような訳語は出ていない。彼は見出し語直後にあった「外を (*ex*) 見る (*pect*)」という語源の情報を訳語として読んでいたのだ。これは自己流の利用に任せた結果の一例である。初級の学習者に辞書を引かせると時間がかかるので、進度が遅れ予定されたカリキュラムをこなせないという考えもあろうが、これは目先のことにとらわれすぎており、外国語の教育目標を逸している。「学校後」の継続的な学習を可能にするためにも、その基礎となるものとして辞書指導は必要である。

### 2.3. 電子辞書に対する生徒と教員の認識

電子辞書を利用する生徒が多いという現状と電子辞書を否定ばかりしている一部の教員たちとの意識の乖離も問題だ。まず生徒たちには電子辞書に対する誤解がある。それは紙の辞書より電子辞書のほうが速く調べられると思っていることだ。見出し語にたどり着くまでは確かに速いだろう。そこまでで事が足りていた彼らがそのように考えてしまうのも仕方ないかもしれない。しかし辞書をうまく利用するためには、そこから先の作業が必要になる。訳語だけでなく例文やその他の情報を参照しながら、目的地に向かわなければならない。たどり着いたところが目的地でなかったからもう一度探しなおすなどといったこともよくある。多くの指摘があるように、このような作業において電子辞書は、一度に表示される情報が少ないことと、その階層性により情報を探すのに手間がかかることがある。Koyama and Takeuchi (2004) では、紙の辞書と電子辞書で英文中の指示された単語の適切な意味とそこにある例文を書き出させる実験を行い、2種類の辞書の違いが単語の検

索時間に差をもたらすことはなかったと報告している。また、この実験では1週間後にテストを行い、調べた単語の記憶を確認した。そして、紙の辞書で調べた単語のほうがよく記憶されていたという結果が出た。この点について、ボタンを押すだけの電子辞書に比べて、紙の辞書では目的の情報を得るまでプロセスが長く、それが記憶に影響したのではないかと分析している。これは先ほどのK氏の見解と一致している。

また電子辞書は紙の辞書と中身の情報は同一という誤解もある。まず文字情報としては同一内容であったとしても表記について異なる点がある。紙の辞書では2色刷りになっているものが多く、重要語・重要事項を強調するなどして検索の便を図っている。また、あまり意識されないものとして文字の大きさがある。『ジーニアス英和辞典(第3版)』では、太さや書体の違いもあわせて30種ぐらいの文字を使い分けている。<sup>9</sup> これももちろん辞書をより使いやすくするための工夫である。カラーの電子辞書は増えてきているが、文字についての工夫には限界があるだろう。文字の問題は電子辞書を見づらくしている1つの原因である。例えば、もっと小さい文字で構わない情報がそうならないことで、重要性の判断がつきにくくなる。そして、限られたスペースに表示される情報をさらに少なくしているのである。また、略語やその辞書の表記の約束などは紙の辞書のようにすぐに参照ができないという問題もある。しかし学生や生徒たちはこれらの点についてあまり認識していない。繰返し継続的な指導を行う中で、そうした特長を理解させながら、どちらの辞書であれ自分が持っている辞書をうまく利用できるようにさせるべきである。その中で必要性を感じれば、自分にあった辞書を求めるようになるだろう。

電子辞書を否定する教員がまだまだ多いことはE氏、K氏の話からもわかる。確かに電子辞書には述べてきたような紙の辞書に対するデメリットがある。しかし、現在は電子辞書のほうが圧倒的多数派である。その理由は、調べるのが簡単そうであるというだけでなく、実際にどこまで使っているかはともかく複数の辞書を参照できること、そしてその携帯性も電子辞書が好まれる理由であろう。教員が電子辞書を否定する理由はもっともなことが多いが、辞書を持参する生徒が少ない習熟度が低いクラスで、電子辞書であろうと紙の辞書であろうと、まず授業に持参していることを評価すべきである。上級者に望むような理想論を彼らに押し付けてもあまり意味はない。また、すぐに他の語義へあるいは他の辞書へ画面を換えてそれらを参照できることや、発音が音で確認できることは電子辞書のメリットであろうし、調べた単語を記録できるようになるなど、その機能は発達し続けている。やみくもな批判ばかりせず、現状に合わせた指導を考えるのが現場の教員の仕事であると言えよう。

### 3. 初級レベルの学習者への辞書指導

#### 3.1. 英和辞典利用法の改善

初級英語を学習する必要がある学生たちはこれまで、英文の中で用いられている語を辞書で調べ前後関係などから適切な訳語を考えるという経験は少なく、単語を単品で捉えて意味を調べるといった経験ばかりしてきた。だからこそ用例のない、または少ない辞書で用が足りると考えてしまう者がでてくるのだろう。このような場合には、なぜそれらの辞書が学習に不向きなのかを体験的に理解させる

必要がある。調べたい単語が載っていたとしても、文に当てはめるときにぴったりの訳語が出ていない。例文の中から同じパターンのもを探そうにも、例文が少なく見つからない。あるいはそもそも例文がまったく載っていない。そのように自分の辞書がこれからの学習活動には不十分であると理解させるのである。ただその後の授業で辞書を使う機会を設けなかったり、単純作業しか与えなければもとの状態に戻ってしまうだろう。逆に、1回の授業に2～3回でも辞書を利用する機会を設ければ、持参する率も高まってゆく。

初めから学習用英和辞典を持っている学生でも、文中の単語の意味を調べるように指示すると、その文中の用法とは関係なく、辞書の最初に書かれている意味のみを調べて満足している様子が多く伺える。このような学生たちも、先に挙げたような学生たちとあまり差はなく、これまで見てきたように英文中における適切な訳語を考え選ぶという経験がやはり不足しているのだ。では、なぜそうになってしまうのか。英和辞典の情報をうまく読み取れないのは、経験不足だけでなく、情報を読み取るための知識が欠如しているからでもある。さらに彼らの持っている学習英和辞典は電子辞書版であることが多く、ある単語を検索した際に11cm×7cm程度の画面に表示される中から情報を得ようとする。必要性を強く感じなければ、下のほうに画面をスクロールしたり、他のボタンを押したりしてさらなる情報を得ようということはあまりしないという特性がある。従って、最初の情報しか見ないという傾向は強くなる。そこで、やはり最初の語義だけでは不十分であり、他の情報も活用すべきであるということを理解させる必要が生じる。

基礎的な単語ほど幅広い語義があり、その訳語も多くなる。そこでE氏のように訳語の

イメージが固定化していると思われる単語について、そのイメージとは異なった語義があることを理解させる取り組みは重要である。英文からの指導も必要だ。Your nose is running. という文を考えた時、runが「走る」ではおかしい。そこで適切な訳語を調べさせる。たとえば『ジーニアス英和辞典(第3版)』(大修館書店)では「容器・からだの器官などが液体を流す[出す]」が自動詞の9番目に、『ウィズダム英和辞典』(三省堂)では「(鼻が)鼻水を出す」が自動詞の10番目に出ている。またそれらの語義に行き着く過程で、覚えることはできないにしてもいろいろな語義があることを確認することにもなる。

### 3.2. 英和辞典を利用するための基礎知識

一般に英和辞典はその語義を「頻度順」に並べているが、複数の品詞で用いられる語については「品詞ごとの頻度順」ということになる。そこで品詞の知識が必要であり、特に動詞については自動詞/他動詞の理解も大切だ。I got sick. の意味を考えようと get を調べると、『ジーニアス英和辞典』も『ウィズダム英和辞典』も初めには他動詞が出ている。ここで用いられている自動詞の語義にたどりつくためには、『ジーニアス英和辞典』では16、『ウィズダム英和辞典』では28もの他動詞の語義を通り過ぎなければならない。これは、辞書はただ上から順番に見ていけばいいわけではなく、基本的な語の基本的な語義を調べるのであって、自/他を含めて基本的な品詞の知識がなければうまく利用できないということを意味する。名詞のC/Uの区別も語義を調べる際にも、英語で文を書く際にも必要な基礎的な情報である。日本語にはない冠詞などと関連しているので、活用できれ

ばとても便利なのだが、訳語の直前にあるこの記号に気づくことはほとんどないようである。

これまでこのようなことを理解せずにきた初級の学習者に黙って辞書を引かせ続けても、なかなか思うように作業が進まない苛立たしさから、ますます英語の学習に消極的になってしまうかもしれない。日本の大学生293人の英和辞典の利用を調査したLupescu and Day (1993)では、英和辞典の利用は語彙の習得に良い効果をもたらすが、見出し語の下に多くの項目があるときは学生を混乱させてしまうだろうと指摘している。そして、学生たちは辞書を効果的に利用できていると思っているが、実際はそうではなく、辞書に親しませる練習をすることが良い結果をもたらすと述べている。親しませるには個々の能力と所有する辞書に応じた指導とともに、辞書を引くためのこれらの知識を理解させることが必要なのである。

文型や語法についての情報は、文法的知識の貧弱な者にとっては利用しにくい。また辞書による表記方法の違いもみられる。文型について、[SVOC]やSを省いて[VOC]としたり、目的語をAで表し[find A C]のように記述したり、さらに[文型3]や[ ]などのいわゆる基本5文型の番号に従った表記も見られる。これらを一様に指導するのは困難であり、全体で基本文型の確認をしたうえで、それぞれの辞書について解説をしなければならない。また、動詞を表すdo, done, doingや、名詞を表すone, one's, oneselfなども解説しなければならない。I did one's homework. のような文ができてしまったり、Help yourself. の意味が調べられなかったりすることが少なくないからである。「節」や「句」という言葉も辞書で頻繁に用いられながら、理解されていない。

一度に集中してこれだけのことを指導する

ことは不可能ではあるが、どれも英和辞典の利用のみならず、英語力向上に必要な知識である。継続的に繰返し指導することが大切だ。

### 3.3. 英和辞典を使わせること

大学生206人に筆者が行ったアンケート調査では、「卒業後の進路における英語の必要性」について、「大いに必要だと思う」が34.1%、「ある程度は必要だと思う」が58.0%と、9割以上が必要性を感じているという結果が出た。また、「卒業までに英語の能力を高めたいか」という質問に対して、87.3%の学生が「そう思う」と回答している。(安井2003) 社会に出た後を見据えて英和辞典の指導を行うということは、こうした学生たちの意識と合うと思われる。しかし、ずれてしまいがちなのが、着実に進むことを期待する指導する側の意識と、すぐにも英語を話せるようになりたいと結果を急ぐ指導される側の意識である。基本的な単語を辞書で確認したり、基礎的な文法事項を学習したりすることを嫌い、すぐにも使えそうに思われる会話表現ばかりに学生たちは飛びつきたがる。しかしそれでは、かえって非効率であることをわからせたい。辞書に慣れ、基本語のいろいろな使い方を知り、例文を応用させる基礎文法力をつけてこそ、英語力が高められるのである。

辞書に慣れさせるために、そして基本的な単語であってもわかっていない重要な語義があるということを知り、確認させるために、特に習熟度の低いクラスでは筆者は授業で毎回20語程度の単語リストを配布し、次の授業までに必ず辞書を自分で開いて意味を調べてくることを課題としている。リストの作成に当たっては中学基本語に相当するものを中

心とし、品詞ごとに分類している。基本的な単語であるだけに辞書に出ている訳語が多いので、どこまで調べるかは学生に任せている。そのため初めのうちは、調べもせずに知っている意味を書いていくだけの者もいる。そのような学生には、「こんな単語知ってるよ」という自分の知識への過信がある。しかし、繰り返すうちにそのようなこともなくなり、少しでも辞書を開くようになっていった。一方で、毎回、必死に辞書を見て細かい字でいろいろな訳語を書き写してくる学生もいる。授業で確認するものがせいぜい4～5であっても、毎回10以上の訳語を書き続けていた。数回続けると3つのパターンに分かれていった。まず、辞書をよく見ながらいろいろな意味を確認してくる者。そして数として最も多いのが基本的な訳語のみを確認してくる学生。最後に、少ないがやったりやらなかったりと中途半端な者。程度の差はあれ、それぞれ辞書を開く回数は増えたと思われる。

単語の意味を辞書で調べる課題を出しながら、授業では初めの数回で品詞や基本文型について触れる。そして以後は、辞書を引かせつつ、そのような知識を確認しながらいろいろな教材を用いて授業を行うが、なかでも学生のアンケートを見て好評なのが映画を用いた授業である。2007年12月に行われた読売新聞とgooリサーチの10～30歳代549人へのインターネットによる共同アンケート調査で、「英語がもっと出来たらいい」と思う人が86%だった。そしてその人たちに「どのようなときにそう思うか」を尋ねたところ、「映画やテレビ、ビデオを見るとき」と「海外旅行をするとき」がそれぞれ44%で1位だった。<sup>10</sup> こうした結果から見ても、教材として映画を利用することは学生の関心と一致するのだろう。映画を教材とする際、初級の学

習者に対しては難しい表現など取り上げず、わかりやすい表現を取り上げ、辞書を引かせ、意味を考えさせる。実際のセリフが1秒3文字程度に縮約されている日本語の字幕をヒントにして考えさせることも出来る。そのようにして授業を進めていくと、自主的に辞書を引く学生も増えていった。

このように、辞書の利用指導を目的とした時間でなくとも、何かのきっかけで辞書を引かせることで、その利用にも慣れ、各種の記号にも慣れていく。例えば、品詞を表す記号について、間投詞以外は約9割の学生が記号の意味を理解できるようになった。自動詞、他動詞についても約8割が理解していた。自己申告であるめに、実際に使えるようになった学生の割合はそれよりも低くなるだろうが、授業開始の時点からの進歩は感じられる。C/Uの理解は3割程度にとどまってしまったが、これは後半、あまり触れなくなってしまうためだと思われ、継続的な繰返しの指導の必要を感じさせられる。

学生たちの自己認識を尋ねると、「授業を受けて英語の学習に英和辞典の使用が重要であると思うようになったか」という問いに67%が「そう思うようになった」<sup>11</sup>と答えているので、辞書利用についての意識は高まったと言えるだろう。残りはほとんどが「もともとそう思っていた」という学生であり、最後まで授業に出席していた学生については辞書に対して否定的な考えを生じさせることはほぼなかった。そして、「授業を受けて、英和辞典を以前よりも効果的に利用できるようになったと思うか」という質問には86%が「そう思う」、14%が「そうは思わない」と回答した。品詞解説などの辞書を引かせるための準備から、授業中のいろいろな場面で辞書の利用を促してきたことに効果があったわけである。

## 結び

本報告では、まず、大学生が辞書をうまく利用できない実態を、中学校や高校での経験などから検討してきた。そして、中学校では辞書を利用する必要がないケースが多いこと、高校でも自主的な利用に任されている様子があり、結果として、意識が高い生徒を除いて、辞書を使わないで済ませてしまっていることを確認した。また、英語の学習に辞書を利用するためには適切な指導が必要であるが、そのような指導が中学校や高校で行われていないことも確認できた。そして電子辞書について生徒側、教員側の双方に理解不足があることを指摘し、辞書指導を妨げている1つの要因として検討した。さらに、そのような状況下で英語教育を受けてきた学生たちに、英和辞典の利用指導をどのように行うか、有効であった実践例を報告した。

課題として、今回は学生たちの主観に基づいたデータを中心的に利用したため、今後は各種データの客観性の確保を考えたい。また、用例の利用についてもっと注目していきたい。電子辞書について、学生によるその使用は今後もなくならないだろう。そしてその機能はどんどん改善されているので引き続き注目したい。ニンテンドーDSという携帯用ゲーム機に辞書ソフトを入れて利用する学生も見られるようになった。これはこれまで述べてきたような電子辞書と大きく異なり階層性がない。色もきれいで多色刷りの紙の辞書そのまま見ているような印象である。ただディスプレイがかなり小さいため、一度に参照できる情報は少ない。どこまで普及するかは不明だが、このような新しい辞書も考察すべきだろう。

## 引用文献:

- ・ 鷹家秀史、「バランスのとれた英和辞典」、『時事英語研究』、1999年10月号、研究社、1999年、12頁
- ・ 投野由紀夫、「辞書をめぐる7つの戦い 使いやすさをめぐるめぐる戦い 英和辞典編」、『月刊言語』、2000年5月号、大修館書店、2000年、35頁
- ・ 森下みゆき、「東アジア高校英語教育 GTEC 調査2006結果より 日韓比較から見えてくる日本の英語教育の成果と課題」、『BERD』、12号、ベネッセ教育研究開発センター、2008年、51頁、<http://benesse.jp/berd/center/open/berd/index.html>
- ・ KOYAMA, Toshiko and TAKEUCHI, Osamu, 'Comparing Electric and Printed Dictionaries: How the Difference Affected EFL Learners', *JACET BULLETIN number 38*, JACET, 2004, 42-43
- ・ Lupescu, Stuart and Day, Richard R., 'Reading, Dictionaries, and Vocabulary Learning', *Language Learning Vol.43 No.2*, Univ. of Michigan, 1993, 277
- ・ 安井健一郎、「大学での基礎英語教育について」、『尚美学園大学総合政策研究紀要』、第6号、50頁

## 参考文献

- ・ 池上嘉彦(編)、『英語の意味』、大修館書店、1996年
- ・ 新英語教育講座編集委員会(編)、『新英語教育講座 第6巻 辞書・単語指導』、三友社出版、1987年
- ・ 松畑熙一、『英語授業学の展開』、大修館書店、1991年
- ・ 笠島準一、『英語辞書を使いこなす』、講談社学術文庫、2002年

- ・ 投野由紀夫、『英語語彙習得論-ボキャブラリー学習を科学する』、桐原書店、1997年
- ・ 竹林滋、千野栄一、東信行、『世界の辞書』、研究社、1992年
- ・ 八村伸一、『英語教育と語法的指導』、山口書店、1984年
- ・ 平野靖雄、『提言 高校英語教育の現場から生徒のうめき声から学ぶもの』、桐原書店、2002年

#### URLs

- ・ 文部科学省 <http://www.mext.go.jp/>
- ・ goo リサーチ <http://research.goo.ne.jp/database/>

#### Notes

- 1 「電子辞書」といった場合、携帯型の複数の辞書が入ったタイプのものだけでなく、CD-ROMなどの形式でパソコンで利用するタイプのものなどを指すこともあるが、本稿では学習英和辞典をはじめとする複数の辞書が参照できる携帯型のタイプのもを指す。
- 2 橋本敏郎、『『活用問題集』を用いた初期指導 『ジーニアス英和辞典 第3版』を使って』、『GCD英語通信』、第38号、大修館書店、2005年、2頁
- 3 関典明、「中学校での辞書指導：ハジメの一步」、『英語教育』、2006年3月号、大修館書店、2006年、11頁
- 4 『東アジア高校英語教育 GTEC 調査2006』ベネッセコーポレーションが日本では2006年7月～2007年1月に3,700人を対象に、韓国では2006年9月に4,019人を対象に実施。
- 5 このアンケートに利用された GTEC for STUDENTS では、そのスコアから受験者の総合評価を6段階に分けている。ここでは上位をグレード5と6、中位をグレード3と4、下位をグレード2と1の生徒としている。(グレード6「英語圏の4年制大学への留学に挑戦できる最低限レベル」、グレード5「英語圏の2年制大学への留学に挑戦できる最低限レベル」、グレード4「短期の語学留学で英語圏に行き、授業についていくための最低限レベル」、グレード3「英語圏のホームステイや海外旅行に行き、英語体験を楽しめる最低限レベル」、グレード2「英語圏のネイティブ・スピーカーの先生に積極的に話しかけるなど、経験をつむレベル」、グレード1「これからの可能性に期待レベル」)
- 6 「英語に関する各科目については、その特質にかんがみ、生徒が英語に触れる機会を充実するとともに、授業を実際のコミュニケーションの場面とするため、授業は英語で行うことを基本とする。その際、生徒の理解の程度に応じた英語を用いるよう十分配慮するものとする。」(文部科学省「高等学校学習指導要領案」2008年12月発表)
- 7 「コミュニケーション英語」で400語程度、「コミュニケーション英語」で700語程度、「コミュニケーション英語」で700語程度の新語を用いて指導し、高校では1,800語程度、中学・高校で3,000語程度を学習することになる。
- 8 お二人には高校の職務でお忙しいところお時間を割いてご協力いただいたことに感謝申し上げたい。
- 9 大修館書店英語辞書編集部、「辞書の文字の話」、『GCD英語通信』、第38号、大修館書店、2005年、18頁
- 10 読売新聞、2008年1月11日、夕刊
- 11 他は、「そうは思えなかった」2%、「もともとそう思っていた」32%。